

第3回 滋賀の地域円卓会議 結果概要

- 日 時：平成26年6月24日（火） 14:00～16:00
- 場 所：淡海ネットワークセンター ふらっとルーム
- 出 席：深尾昌峰氏、北田真規氏、山口美知子氏、船越英之氏、遠藤恵子氏、
沖野宏文氏
(事務局：県民活動生活課 伊藤・吉村、大津市自治協働課 木下)
- 欠 席：谷口郁美氏、西村勇哉氏

■内容

- ・オープニング
- ・プレ地域円卓会議 in 東近江の振り返りと意見交換
- ・総括

オープニング

- ・趣旨説明、スケジュール確認等

深尾氏：個人的はもう少しこのチームが地域の後方支援的に動いた方がいいと思うので、そういったことを含めて今日議論していきたい。

ソーシャルビジネスや、地域で課題を解決していくための仕組みの種のところをどう育てていくかを議論していきたい。

プレ地域円卓会議 in 東近江の振り返りと意見交換

- ・事務局より前回の円卓のポイントを説明

深尾氏：前回の東近江では、ある意味無理やり円卓をやってもらったのですが、山口さんとしてはどうであったか。

山口氏：第1回の円卓でもお話ししたとおり、元々就労支援の課題であったが、関係する部署が多岐にわたっていた。産業振興や福祉施策、企画等々が絡んでくる話なので、当時、庁内でも連携組織がなかったし、外とも繋がりがきれていない状態であった。一度関係者を集めてみようという場にさせてもらえたらありがたいということで第1回の円卓で提案をして、プレ円卓に繋がった。想像していた通り、すごく活発に意見交換していただいて、初めて聞いた話も多いという関係者もいた。

実は、今年度から庁内に就労支援のプロジェクト会議を立ち上げた。プレ円卓で参加した職員はほとんどメンバーに入っている。当然話はすんなり「あのとき聞いた話の延長よね」ということで進んでいる。それまでかたくなに「うちの仕事ではない」と言い続けてきた商工労政課がうちの仕事やなど、言いだしたのが大きなことだった。

次回からは庁内だけではなく、プレ円卓で来ていた外のメンバーも少しずつ交えながら、具体的にどのような仕組みを作っていくのか、という話し合いを進めるところまできた。本当にいいきっかけだったと思っている。

深尾氏：今の話の中でキーワードがいくつかでてきた。円卓会議の効能としては、例えば「関係者が寄って、初めて聞いたということが共有される」であるとか、「情報や課題が共有されて、自分達も考えないかな」というモードになっていく、という効能までだと思う。そういう意味では、東近江では初期の効能が発揮できるよう、うまくしつらえていただいた。これを機に地域の動きがでてくれば大成功だと思う。ほかの皆様方も意見・感想があればお聞かせ願いたい。

遠藤氏：山口さんがなぜ就労支援が課題と思ったのかが、その時は伝わらなかった。先日、**kikito** のシンポジウムでの話を聞いて円卓会議とつながった。そう思うと円卓会議の場で参加者が全ての状況を把握することが困難なことだと改めて思った。

深尾氏：普通のシンポジウムだとみんなに分かってもらわないといけないので、内容が薄くなってしまう。だから確信に入っていくまでに時間がかかってしまい、時間が足りないというのが普通。逆に言えば、円卓会議の場合は円卓に入っている人たちが理解できることでいいのだと思う。

今の指摘はすごく大切に、みんな分かりましょうとする場になると円卓に入っている人からすれば相当底の浅い議論になってしまう。逆に言うと、周りで聞いている人も補足的情報が入れば一気に見える、ということかもしれない。これは円卓会議がうまく機能するための一つのポイントかもしれない。

沖野氏：前は矢島里香さんに来てもらった。矢島さん自身の発言というよりは、よそ者だから言えたこと、というのが大きかった。例えば行政職員がもっとこういう場に出て行ったらいいのでは、など。議事録を見ても山口さんが「矢島さんでないとできない」と言った箇所がある。

円卓会議をする上で、なんでもズバツと言える人、それは関係者だと言えないけど単純に外から見て「こんなことをすればいいんじゃない？」と気づきみたいなことをバツと言ってくれる人の存在がよかったと思うので、今後も同じようにやればよかったと思う。

深尾氏：ステークホルダー間で知っている人がいると「このこと言うとあの人傷つくな」とか、色んなことに配慮してしまい、本来の確信的なことを言えないことがある。そういった外部人材みたいな人について、どういう立ち位置の人をどうデザインして円卓に入れていくのがいいのか、というのは考える余地があるかもしれない。

教えてください、という感じだとぶら下がり型になってしまう。課題や地域の状況によって変わってくるのかもしれない。

船越氏：前は非常に熱い思いを聞けたと思う。自分も遠藤さんと同じで、自分と違う分野の話だったので状況が分からないまま最初は戸惑いがあったが、熱い思いが周りの人に伝播しているのが伝わった。こんなに頑張っただけやっている人がここにいるんや、ということを地元の人がみんながみんな知らないのだと思う。そういった頑張っている人をどのように地元伝えていけばいいのだろうと思う。

深尾氏：地元でも知っているようで知らないことは結構ある。

船越氏：あのよう熱い思いで語ってもらえれば、自分の課や仕事でも何かできることがあるのではないか、と思えたから先ほどのプロジェクト会議の話につながったのではないかな。

北田氏：僕も前回状況が分からないまま聞いていたが、僕が意識していたのは円卓の場で喋っていた人の話をどこで喋らしたらおもしろくなるのか。例えば、同友会さんや経済界さんの前で喋ってもらって、「仕事があるんや」ということを投げれば、ちっちゃい仕事を集めるような別の新しい仕事が生まれるかもしれない、という観点で聞いていた。

深尾氏：完全玄人目線ですね。先日、それとまさしく同じようなことがあった。それは某大手の広告代理店の人が、この人をどうやって自分の資源で繋げてあげれば、この人に迷惑をかけずに、この人が社会的認知を得られるか、という視点で円卓の話聞いていたこと。それと一緒に、共感みたいなものが生まれると、自分ができることは何かということと重ね合わせながら聞いてもらえる。前回の東近江の円卓ではそういったことが、地域の人にも起こったし、役所の人にも起こった。自分の管轄外だと思っていた人達が動き出したのはまさしくそういうこと。自分の部署もやらなあかん、とか自分の部署でやれることはなんだろう、という思いを重ね合わせていたのだと思う。

山口氏：笑い話みたいな話だが、庁内の会議を開催したときに庁内に就労支援の相談員がいたことが分かった。人権課におられたのだが、一昔前までは、一部の人のみを対象に就労支援の相談を受けていたが、数年前に法律が変わってハローワークと同じように全

ての人を対象に相談を受けることができるようになった。しかし、職員はそのことを忘れていたような状態で、こういう相談員がいるという報告は回ってきていたが「見ているけども見過ごしている状態」となってしまうていた。1回目の会議で相談員の存在が分かり、2回目の会議で、実は今年度の相談員の配置が決まっていない、ということが分かった。わざわざ福祉のセクションで若者の就労支援の相談のために予算をつけていたのに、庁内こんな人材がいたなんて、という状態になり、早速次の日に話を聞きに行った。毎回新たな発見がある。

深尾氏：それは逆に言えばみんながアンテナをたてはじめることによって、自分達の持っている資源にひっかかってくる、ということ。一番大事なことは、地域に何かが残っていったり変わっていったり動き始めたりすることだと思うので、そういった意味では東近江の事例は成功だったと思う。

沖野氏：就労支援の話は東近江だけではなく県内の他の地域でも同じような課題があると思われる。今の東近江の事例をなんらかの形でまとめると、他の同じような課題を抱えている地域とうまく共有できるのではないかな。

深尾氏：ただ同じようにやってもうまくいかない。市町村がそこまでの情報発信をする責務を負うかどうか、というところは悩むところ。

沖野氏：やり方というよりは、こういうことがあったという事例。円卓会議の成果として県が協働セクションではなく福祉セクションに情報発信するときの一つの方法として考えられる。

山口氏：今日の日経新聞に環境省が「Fun to Share」の記事を出すのだが、その中に前回の円卓にもでてきた中間就労の場になった「薪プロジェクト」が事例として紹介されている。記者に中間就労の場としても成果を上げていることを入れてほしい、とお願いしたところ、写真のキャプションに入れてくれた。この記事は環境に興味がある人しか読まないが、興味がある人がもし検索してくれたら、気が付く人がいるのかもしれない。この記事は共感した人の伝播で記事になった。共感を生み出せる人の存在は大事。

船越氏：共感を生み出せる人はなんらかの形で当事者の状況に近い状況の人なのではないかな。同じように何かに関わっていて問題意識も持っている人ではないかなと思う。

深尾氏：場が生み出す共感みたいなものも現実的にあると思う。今、ある荒れた中学校の再生プロジェクトに携わっているが、おもしろいのが嫌々行政に連れてこられた人がそ

の気になっていく、ということ。知ってしまうと自分も何かしたくなるというのが大事かもしれない。情報を知るという意味では円卓会議を契機に動き出すこともあるかもしれない。自分は関係ないと思っている人たちに伝えていくツールとしてもありなのではないか。問題にもよるが。

北田氏：問題を投げ人的モチベーションにもよる。前回は全員が思いもあって課題も見えていたからうまく繋がった。逆にあそこまでいくのが大変なのかもしれない。実際、何に困っているかも分かっていない地域の方が多いのではないか。

山口氏：気が付いている人はいるのでは。

深尾氏：完全に行政課題になってしまっているような課題は行政の言い訳合戦になるから円卓には向かない。まだお見合い状態でどこの部署もボールを投げているような課題が円卓会議には合っている。

北田氏：行政の人が困っている課題は地域の人達にとっては案外困っていない。実際に現場で動いている人達に話を聞かないと課題は分からない。

遠藤氏：「困っている」の次元が違うと思われる。

北田氏：行政から、困っているから話を聞いてきて、と言われて、実際に地域に話を聞きに行くと、困っているとされたことが今まで一度もない。

深尾氏：例えば今、京都の観光で本気で困っているのは LGBT（性的少数者）の問題。しかし、行政課題にはならない。マイノリティの人たちの問題はあまり行政課題には上がらないから。しかし、そうした、ある意味で本当の課題で、みんなが前のめりにならざるを得ないようなことを素材に、いかに自治力をつけていくか、というある種のテーマ性みたいなものが大事。例えば町内会が高齢化しているという問題を取り上げて盛り上がらない。なぜなら、困っているのは行政だから。住民の人たちは町内会がなくても何とかなると思っているから深刻じゃない。そういった意味では東近江の事例はよかった。

山口氏：行政が困っているんじゃないか、と思っている程度のことというのはそこまで課題にはなっていない。本当に困っている人を知ってて、これはホンマになんとかしなあかん、と思ったらおそらく動きは全く変わってくると思う。でも、もしかしたら現場は実際にそういう状況にならないと課題認識はしないのではないか。

先日、大きな自治会に呼ばれて話をする機会があって、おじいちゃん達の前で人口減少の話をした。人口減少の話をして最初は、関心を持ってくれなかったが、東近江市だけが他の市町より人口を増やすのは至難の業かもしれないが、この自治会が他の自治会よりも人口を増やすことはできる、という話をすると、だんだんおじいちゃん達の目が輝いてくるのが分かった。将来像が誰にも分からないので、今のまま続くとみんな思っている。

北田氏：僕たちは移住・定住の取り組みをやっているが「移住者は来てほしい。でも家を貸すのは嫌」というのがよくある。

山口氏：本気で困っていないのでは。

北田氏：その通り。

深尾氏：リアリティを持った困難さであるとか未来予想の話を共有できると、例えば今の人口減少が未来の危機に繋がっていくということが実感できると、おじいちゃん達みたいに変わっていきけるのではないか。その意味では危機が分かる工夫とかステークホルダーの人たちが想像しやすい情報共有のあり方というのは大事。

山口氏：その情報はすごい嫌な情報になってしまう。えっ家がこんなに減っていくの？というように。

深尾氏：人口減少と言ったときに、それがリアリティを持って伝わるかどうか。例えば自分の町の家がだんだん少なくなってきてこのペースでいくと…というように自分の町に落としこんで考えられるかどうか。

北田氏：実際慌てだすには3年くらいはかかる。高島で家が残り3軒程度になった集落があるが、そうなるからしか慌てださない。円卓でテーマとして取り上げるにはその3軒になったところをどうするか、の方がいいのかもしれない。

遠藤氏：円卓に来ていただくステークホルダーの目利きもものすごく大切。前回は山口さんだからできたと思う。この人とこの人を呼べば解決する、というのを発想できないと呼べない。そこが一番難しい。

深尾氏：円卓をプロデュースできる人が地域で出てくることも大事。

山口氏：おそらく1人では無理だと思う。地域にそういう人が2、3人いて相談ができるのが理想。1人ではどう頑張っても偏りがでてしまう。

北田氏：次回からの人の集め方は相当難しい。

深尾氏：今ここで議論していることをまちづくりに取り組んでいる人たちに伝えていかなければならない、というのはある。人を選ぶのは難しい、ということを理解してもらうのは大切なこと。

ところで、プロデューサー的な人は地域にいるのか、どうなのか。

山口氏：いると思う。しかし、1人では無理。今栗東に住んでいるが栗東にも何人かいるはず。何人かが相談したらそれなりの人は集められるだろうと考える。

沖野氏：行政が会議体をつくろうと思えば結構簡単に作れる。その時に、よくありがちなのが、例えば市役所でまちづくり協議会をつくろうとして、「なんとか長」と、長のつく人だけを集めてうまくいきませんでした、というケース。それがものすごく多い。PTAでも自治会でも本当に動いている人は長のつく人ではなく普通の人。でもその人達を繋げるプラットフォームがないので把握が難しい。

深尾氏：そういう意味では行政は反省した方がいい。なんとか協議会でうまくいっている事例はほとんどないと思う。偉い人を集めて、同じような議論ばかりをしている。そういったものにみんなどこかで限界を感じている。

沖野氏：市町の会議で、自治会やまちづくり協議会が動かない、といった議論をしている。それは本当の課題ではない。

山口氏：まちづくり協議会が必要なのは行政だけ。しかし、それが機能するかしないかは地域の将来像を間違いなく決めることになる。まだまだ地域にはその感覚がないし、気が付いた地域だけがどんどん進めているのが現状。

東近江の場合は団体の長を入れての協議会という発想は全くなくて、活動する人が集まって役員をする、という作り方。そういう意味では地元とどうリンクさせるか、という別の課題は生じてくるが、比較的うまくいっている方だという気がしている。

深尾氏：東近江での円卓は山口さんのご尽力や、ある意味偶然により色々なことが動きだしたことで、地域が迷惑に思ってくれずにありがとうと言ってくれたところは非常によかった。

さて、今年度のゴールの議論をしていきたいのだが、当初の計画からすると実質白紙に戻っているの、こういうことやった方がいいなど意見があれば伺いたい。

北田氏：前回の東近江のような形で成功事例を作っていくというのが理想かもしれない。

深尾氏：成功体験を地域の人たちに持ってもらって、これはおもしろいとか、これならできる、とかを実感してもらえ人が増えるといい。

深尾氏：当初の円卓会議の設計は僕たちが地域で議論をすればその地域も変わる、というものだったが、そうじゃないと思っている。東近江のようなパターンでいくつか事例をつくって、その人たちともう一度座談会的なことをして、円卓会議でその地域の何が変わったのかを発信できると思う。事務局的には何か意見はあるか。

事務局：主は県ではなく、あくまで地域だと考えている。今年度は円卓のモデル地域を2、3地域で作りたい。そのモデル地域をどこにするかというところが事務局でも一番頭を抱えているところ。委員さんの経験・知恵をかりながら決定していきたいと考えている。

深尾氏：どこにするか、という議論は後ですとして、モデルをつくっていく、という部分についてはみなさんはどうか。この会議体の役割というのは地域円卓を行うに当たっての課題・ノウハウをどんどんため込んでいき、吐き出していき、それで地域円卓が活発に行われるような環境をつくる、あるいは地域のプロデューサーと価値観を共有していく場にする。そのためにモデル的に2、3地域で行うという形かどうか。

一同：同意

深尾氏：ではどこでどういう議論をするか、ということを決めたい。

山口氏：せっかくやるのであれば色々なパターンを試してみてもいいと思う。例えば行政ではない人が、これは解決すべきだとなった場合に、どういう障壁があったり、ステップが必要なのかを検証してみるというのもありかなと思う。

北田氏：広くし過ぎると難しい。行政の人が主導で動くというのを軸にして持ち出す課題を変えていった方が形になる気がする。一般の人を軸にすると収集がつかなくなる気がする。

深尾氏：それを検証する意味でも民ベースの円卓をやってもいいかもしれない。

山口氏：一回やってみて、やはり無理があるなということもあるかもしれない。

深尾氏：一度やってみて、このような場合にこのような人に来てもらえばできる、という世界があるかもしれない。

北田氏：それをやりだしたら事前の打合せ・準備がものすごく大変になるのでは？

深尾氏：沖縄の円卓会議で、台風時の停電について、をテーマに円卓をしたが、地域の人たちが話し合う中で、不安で仕方がない人達や明日は我が身だという思いを重ねながら行動できたことはその町にすごく生きる、と感じた。

民ベースで今頑張っている人や困っている人がいて、役所も絡んであげた方がいいのにその糸口を見つけられないという課題があれば民ベースでの円卓もできるかもしれない。

遠藤氏：ネットワークセンターで相談業務をしているが「困っている」という風に相談があるかと言えばそうではない。

深尾氏：確かに「困っている」という風に旗を振っているわけではないかもしれないが、何らかの思いがあってNPOをやっているので、そこを掘り下げることは必要。

北田氏：先日の東近江の円卓の事例は大きな分野でいうと福祉になるのか。

深尾氏：そこはいいポイントで、いわゆる対人援助領域はやりやすいと思う。困っている人がいてそれを助けなければいけない問題。例えば、保育や子どもの虐待の問題など人を助けたり人を援助したりするものは分かりやすい。

北田氏：福祉や子育てに絞った方がやりやすいのでは。

深尾氏：滋賀県で一番子育てしにくいところはどこか。

遠藤氏：待機児童が多いのは瀬田。

沖野氏：待機児童と言ってしまうと保育所をつくれればよい、という話になってしまう。

深尾氏：もっとシビアな状況はないか。

沖野氏：来てくれるかは分からないが、県の児童相談所は事例を持っているかもしれない。

深尾氏：児童相談所がちゃんとSOSを出せる円卓の場になれば非常にいい。

遠藤氏：今、大津では貧困家庭の教育支援に連携して取り組もうという動きがある。社協と（NPO法人の）CASNも入っていたと思うが。大津市が絡んでるのかもしれないが、昨年12月に話合いの場が作られたと聞いている。

山口氏：もしかしたら国の生活困窮者のモデル事業を受けているのかもしれない。

北田氏：困っている人が明確に分かるものに絞った方がよい。

深尾氏：障害者の問題では、なぜ最低賃金が安いのかという問題で福祉分野以外の人で色々な知恵を持った人に集まっていた方がいいかもしれない。

モデル地域をこの場で決められればよいが、なんとなく決め手に欠ける気がするので、一回そのような人たちと対話しないと難しい。もし可能なら我々も現場にお伺いして、対話をすることで、テーマから一緒に作っていくのはありだと思う。

山口氏：この会議体のゴールの再確認だが、円卓会議が地域で勝手に開催されていくようにノウハウなりを蓄積して提供していこう、ということか。

深尾氏：そういうこと。今年度は円卓会議のモデル地区を2、3地域でつくる。円卓で課題解決の一步を踏み出してもらおう。それだけでよいと思う。

北田氏：東近江のときみたいに喋れる環境を作って、言いにくいことを僕らが言う。その後、地域で新たな会議体が立ち上がるというところまでをどうサポートできるか。

沖野氏：滋賀県にはめちゃくちゃ大きな困りごとはない、という意見もある。

北田氏：僕が今まで携わってきた課題は生き死にのレベル。滋賀に来てからは生き死にのレベルではまだ出会っていない。

深尾氏：言われつくしているかもしれないが、湖南地域の外国人労働者のコミュニティの問題や学校の問題など滋賀県特有の、まだ人口が増えている県としての問題はあると思う。

次回、そうした問題へのヒアリングをやらせてもらって、お手伝いできる場所があればいいと思う。メインのターゲットをどこに絞るかを今日決めておきたい。2か所くらいの地域で福祉や対人援助系の話で頑張っている人がいる地域が理想。

遠藤氏：最近設立相談であったのが、学校を卒業した後に行くところがない子に対して、親御さんや元教師がNPOを立ち上げてその子たちの就労支援したいという相談が3か所あった。

北田氏：それは何のための就労支援か。

遠藤氏：養護学校の卒業生が行くところがない。そのための就労支援。

深尾氏：いわゆる共同作業所の今日版をつくるという話だと思う。行政で言えば、例えば商工系のセクションが持つと「中途半端な仕事」と繋いであげられるかもしれない。福祉の世界のことを福祉で解決しようとするため。今まで福祉の人たちは議論しつくしているし、行政でできることはやってきている。

山口氏：福祉はどうしても制度にあることをやるのが仕事であり、制度外やグレーゾーンにいる人を何とかしないといけないのは分かっているけれど、どうしていいのか分からないというのが福祉分野の最大の悩み。そこに誰が手を差し伸べることができるのか、ということが全く決まっていない。

例えば、生活困窮者支援法ができて生活困窮に陥った人だけが対象で、ちょっと手前の人対象外となってしまう。そこを誰が支えるのか、という話になったときになすりつけ合いではなく、みんなで支えようという話をしている。

自分の仕事をその観点から見直したときに、商工労政課が毎年東近江市内の会社に企業訪問しており、そこに一枚ペーパーを作って就労支援の話をしてもらい、さらに関心のある企業に対してはワーカーがでかけていく。そういうきっかけづくりならできるのではないかと考えはじめている。福祉の枠をはずさないで制度からもれてしまう人の対応は無理だと思う。

深尾氏：福祉の無力さに帰結させない、みんなの知恵が集まったら色々なことができるという可能性を感じてもらえるような話、脱福祉化させていく視点はいいかもしれない。地域がかかえている福祉ニーズはあるが、福祉の人はそれが当たり前だと思っているから困っているという自覚がない。福祉の担当者は制度でやっているから困っていないで、本当に思いをはせるべきは本来自立生活できる人ができない環境においやられて、それが当たり前だと思っていること。

では、福祉をメインテーマにしていきたいと思う。

沖野氏：ビジネスモデルから入るという手もある。

北田氏：一つ思っていたことがあったのだが、前回どうやって僕らのネットワークなりを円卓につなげていくのかが見えなかったので、そこをどうするのか。

深尾氏：一回きりではないデザインになるかもしれない。東近江の場合は山口さんがいるから回っていくかもしれないが、本来は東近江でも3、4回くらいのパッケージで関わられた方がいいのはいい。最初の課題設定とそれを受けて次どうしよう、というところも責任を持って入っていけるといいのかもしれない。

北田氏：全員が行くよりも、例えばこのメンバーの中から2、3人のチームで分けて地域に入る方が動きやすい。

沖野氏：あとは一回一回のアウトプットではないか。今はホームページで公開しているが、アウトプットしないと、いくらいい議論をしても誰も知らない、ということになりかねない。

深尾氏：次は米原にヒアリングに行きましょう。みなさんも普段の取り組みのなかでアンテナをはっていただければと思う。

総括

- ・福祉をテーマにする。
- ・ヒアリング等しながらテーマ設定から一緒に円卓をデザインしていく。(民ベースでの円卓をやってみるのもよい。)
- ・2か所くらいのモデルづくりを通して、そのことを何らかの形で発信していく。
- ・この円卓会議の仕組みをうまく利用してもらい地域をつくっていくことが大事。
- ・当初はこのチームが色々な場所で円卓会議をし、それを見てもらうというスタイルだったが、今後は実際に地域に入って動き出す仕組みの手伝いをしていく。
- ・次回、米原でヒアリングを行う。